

## 令和7年度 第4回 生駒市公益活動アドバイザー会議録

開催日時 令和8年3月23日(月) 13:30~16:40

開催場所 生駒市市民活動推進センターららポート研修室

出席者

(アドバイザー) 佐藤由美氏、田中晃代氏、土坂のりこ氏、山納洋氏(五十音順)

(事務局) 市民活動推進センター所長 大垣、係員 西田、  
ボランティアコーディネーター 池邨・宮平・森村

(傍聴者) なし

案件

### 1 採択事業の報告及び助言

以下、発言要旨

#### 案件1 採択事業の報告及び助言

(1)一般社団法人 IDS

【申請者から事業の報告(省略)】

(アドバイザー) 事業を実施してわかった課題に、人手面を挙げられていますね。

(申請者) 当初、販売を担う人員と、啓発や案内を行うボランティア的な役割を、1人が兼ねる形を想定していました。しかし実際には、販売が忙しくなると説明に手が回らず、両立が難しい状況でした。そのため、ボランティア専任の人員が必要だと感じています。一方で、ボランティアとして人に関わってもらうこと自体も容易ではなく、人員確保の難しさが課題です。

(アドバイザー) 多くのNPOや市民活動団体は、資金を組み合わせながら試行錯誤して運営しています。人件費や人手確保に向けて、見えてきた方向性はありますか。

(申請者) 販売側でしっかり実績を上げることが重要です。実績が出れば、賛同してくれるキッチンカーや会員も増え、例えば自治会のイベントでも通常1人のところを2人体制で参加させてもらうなどの交渉がしやすくなります。その利益の中から、啓発活動に必要な人員や時間を確保するという形で、事業と活動を両輪で回していく必要があると考えています。

(アドバイザー) 自治会未加入の個人への周知についてはどのように考えていますか。

(申請者) 市の広報やホームページでの周知に加え、自治会のお祭りなどで来場者にチラシを配布しています。また、「どんどこまつり」のように広く開かれたイベントでも周知を行っています。

(アドバイザー) 自治会に属していないものの、防災や食に関心を持つ方も多くいます。そうした方々へのアプローチも重要ではないでしょうか。

- (申請者) ご指摘のように、さらに広げていく必要があると感じます。例えば、チラシの配布先を工夫してより多様な方に届く方法を検討していきます。
- (アドバイザー) 特に障がいのある方や外出が難しい方など、情報が届きにくい層への働きかけも重要です。
- (申請者) 関係機関等を通じて、より幅広く周知できる方法も考えます。
- (アドバイザー) 自治会ごとに、防災に対する意識や取組に差は感じられましたか。
- (申請者) 全体として、まだこれからという印象です。自治会館が避難所となる場合や学校が避難所となる場合など、具体的な運用は十分に整理されていない部分もあります。現在は、民間の動きとして関心を持っていただいている段階であり、今後、行政と連携しながら具体的な運用を詰めていく必要があります。
- (アドバイザー) お祭りや防災イベントなどでは、災害時の具体的な行動について共有されていますか。
- (申請者) 防災をテーマにした訓練等では一定の説明がされていますが、日常的なイベントの中で広く共有されているとは言い難い状況です。
- (アドバイザー) 防災意識の向上と合わせて、本事業の周知を行うことが有効だと感じます。
- (申請者) 自治会との対話を通じて、防災意識の向上とともに、本事業の必要性についても理解を深めてもらいたいと考えています。なお、本事業は初動対応ではなく、避難生活が長期化した際に、温かい食事や甘いものを提供するなど、心のケアの役割を担うものとして位置づけています。

## (2) シフクノプレイス

### 【申請者から事業の報告(省略)】

- (アドバイザー) 高学年のこどもが低学年のこどもをサポートする姿が生まれている点は、とても良いと感じました。大人が手を出さず、こども自身がやりたいことを実現していく場は重要でありながら、容易ではありません。一方で、うまくいかなかった点として、場所の広さや機能との関係が挙げられており、当初の目的と手段にズレが生じている可能性も感じました。現時点でどのように整理されていますか。
- (申請者) こどもたちは「食べ物の提供」を希望しています。3回目にはマフィンを作って販売し、「美味しい」と言ってもらえることが喜びになっていました。ただ、それだけでは関われるこどもの数に限りがあり、役割の偏りも生じてしまいます。今後は、特に中学生以上のこどもに対して、自分たちで企画を立て、ブースを持って参加するような形に発展させていきたいです。地域の広い場所を活用しながら、広報や運営も含めて主体的に関われるようにしたいです。
- (アドバイザー) 来年度は、中学生の主体的な活動を軸に展開していくイメージでしょうか。
- (申請者) まずは今回参加したこどもたちがステップアップしていくことを大切にしたいと考えています。その姿を見て「自分もやりたい」と思うこどもが増え、広がっていく

くことを期待しています。

- (アドバイザー) 年齢の低い子どもたちはどのように関わることを想定されていますか。
- (申請者) 低学年の子どもは、販売などの手伝いから関わります。「いらっしやいませ」と声をかけることから始め、経験を積み重ねていく中で、将来的に自分たちの企画へとつなげていきたいです。
- (アドバイザー) 年齢に応じて関わり方が変わり、最終的にプロジェクト化していく流れですね。
- (申請者) はい、段階的な関わりをイメージしています。
- (アドバイザー) 現在は申請者ご本人を中心に運営されていますが、今後仲間を増やしていくイメージはありますか。
- (申請者) 仲間は増やしたいです。ただ、方向性への理解がないと活動がずれてしまう可能性もあるため、広げ方については慎重に考えています。一方で、参加している子どもの保護者などからは、継続的に関わりたいという声もあり、共感を起点に仲間が広がっていけばと考えています。
- (アドバイザー) 多世代交流についてお伺いします。どのような年齢層がどのように関わっていましたか。
- (申請者) 広報が子ども向け中心になってしまい、高齢者層には十分に届かなかった点は反省しています。一方で、3回目には高齢の方に来場者としてではなく、出店者として関わっていただきました。子どもと同じ場で活動する形となり、この方法は有効だったと感じています。
- (アドバイザー) 仲間づくりの観点でも、多世代が関わる可能性がありますね。
- (申請者) ららポート登録団体の方にもご協力いただき、子ども向けの工作などを一緒に実施しました。今後も、来場者としてではなく、担い手として関わっていただく形の方が、継続的な関係につながりやすいと感じています。
- (アドバイザー) 保護者同士のつながりも含めて、広がっていくと良いですね。

### (3)生駒南第二小学校 果樹園プロジェクト

#### 【申請者から事業の報告(省略)】

- (アドバイザー) 自然を相手にする活動の難しさは他の事例でも見られますが、そうした前提を踏まえた運営が必要と感じました。また、本事業では小学校を中心に自治会同士の連携や、子どもたちの交流の広がりも意図されていたと思いますが、実際に取り組まれてみて、その点での変化はありましたか。
- (申請者) 自主防災訓練や夏祭りなど、これまでも継続してきた活動の中で、自治会同士の関係性は一定築かれています。第二小学校区では、自治会長も継続して務められている方が多く、顔の見える関係の中で活動しています。本プロジェクトによって大きく関係性が進展したというよりは、「こうした取組を持ち込むこともできる」という一つの事例を示せたと感じています。今後、アイデアや資金があ

れば、様々な展開が可能であるという意味で、ケーススタディになったと考えています。

(アドバイザー) 小学校との連携について、日常的な管理や関わりはどのような形で行われていましたか。

(申請者) 果樹は日々の水やりが必要な作物ではありませんが、一部設備の不具合により水が行き届かない期間があり、生育に影響が出たことがありました。印象的だったのは、小学校の卒業式での出来事です。6年生の中から、校内の空いた畑を活用して庭をつくる提案があり、実際に形になってきています。本プロジェクトの活動を見たことが、こどもたちの主体的な発想や行動につながったのではないかと感じています。

(アドバイザー) 複数の自治会が関わり、小学校を軸にした広域的な活動となっている点が特徴的だと感じました。こうした取組の中で、大切にされていることは何でしょうか。

(申請者) 所属する自治会は比較的活発な活動を行っていますが、同じ小学校区内でも温度差があります。その中で、他の自治会にも活動の楽しさや可能性を伝えながら、一緒に取り組む関係を広げていきたいと考えています。顔の見える関係を築くことが、平時だけでなく災害時にも重要になると感じています。特に災害時には、直接的な被害よりも関連死の方が多いと言われており、地域のつながりによる支え合いが重要です。そのため、自治会としても「災害関連死ゼロ」を目標に掲げています。

(アドバイザー) 防災という観点も含めて、地域の関係性を再構築していくことが本事業の本質にあるように感じました。

(申請者) その通りです。以前から他地域の事例を参考にしながら、同様の取組を実現したいと考えていましたが、資金や場所の課題があり実現できていませんでした。今回の事業は、補助制度を活用することで実現に至ったものであり、今後も継続・展開していくためには、用地の整理などの課題を解決していく必要があると考えています。

#### (4)スキマダンスクラブ

##### 【申請者から事業の報告(省略)】

(アドバイザー) 芸術活動には、「芸術のための芸術」と「社会のための芸術」という二つの方向性があると感じています。社会性を重視する場合、成果として「どのように社会に役立ったか」を示す必要があり、不登校のこどもたちへの効果などもその一例として挙げられると思います。しかし、それを強調しすぎると、「困難を抱えたこどもたちがこう変わった」という形で語らざるを得ないジレンマも生まれます。一方で、本活動は、支える側の成長や、市民が他者をエンパワーメントする方法を獲得していく可能性も含んでいるのではないかと感じました。芸術としての価

値と社会的な価値の両面について、どのように捉えておられますか。

(申請者) 明確にどちらかに寄せているわけではなく、両方の側面が共存していると感じています。当初は、不登校のこどもたちのコミュニティに関わる中で、ダンスを通じて何かできないかという思いから始まりましたが、実践を通じて、芸術的な深まりと社会的な効果が相互に作用していることを実感しています。例えば、鏡のない空間で誰でも参加できるように設計し、自発的に動くプログラムを取り入れるなど、社会的な意図を持った設計を行っていますが、同時に、初めて踊る人が自由に身体を動かす瞬間は、芸術としても非常に価値のあるものだと感じています。そのため、どちらか一方に位置づけるのではなく、両方の価値を持つ活動として継続していきたいです。

(アドバイザー) 社会性を強調しすぎることで、本来の価値が伝わりにくくなる側面もあると感じます。今のお話のような価値が、より多くの人に伝わるとよいと思います。

(申請者) ありがとうございます。本来はそのような価値を大切にしているのですが、補助事業として説明する際には、わかりやすい形に整理せざるを得ない部分もあります。ただ、実際には非常に可能性のある活動だと感じており、継続していく中で、その価値をより明確にしていきたいです。

(アドバイザー) 継続の中で価値を言語化していくことが重要ですね。

(申請者) はい。活動を続けながら観察し、その知見を共有できる形にしていきたいです。将来的には、芸術が市民に開かれたものとして広がるようなデザインとして提示できればと考えています。

(アドバイザー) 今回の議論を踏まえると、社会性を持った表現活動を深めていくためには、その価値を哲学的に捉え、言語化していくことが重要になるのではないのでしょうか。

(申請者) その点は強く意識しています。これまでも活動を続ける中で、自分なりの哲学を持って取り組んできましたが、それを他者と共有できるレベルまで高めていく必要があると感じています。今後は、さらに活動を発展させ、市民に広く開かれたアートプロジェクトとして展開していきたいです。

(アドバイザー) 非常に重要な取組だと思います。

## 【前半の事業総括】

・田中氏

スキマダンスクラブは、ダンスを楽しむ活動の中で結果として地域活動になっている点が特徴的です。「社会のために何かをする」という発想ではなく、「やりたいことを続けていたら、気がついたら社会に役立っていた」という状態が、今の市民活動の一つの方向性として見られるようになってきているのではないのでしょうか。また、「支援する」「助ける」といった構えに対して距離を感じる人も多い中で、自然体の関わりの中で結果的に誰かの役に立っている、というあり方の方が受け入れられやすい側面もあると感じます。

一方で、このような活動は、あらかじめ成果や効果を予測することが難しいという特徴もあります。そのため、助成金としてどのように関わるのかという点についても検討が必要になります。個々の活動に任せるのか、それとも制度として一定の枠組みの中で支えていくのか、支援する側のスタンスも問われる領域であると感じました。

・土坂氏

山納氏がこれまでのアドバイザー会議にて度々「まずは“場”を温めなければ」とおっしゃってこられました。全体的に活動の「場」が温まってきている印象を受けました。補助金を適切に活用しておられます。計画どおりに事業を実施するというのではなく、活動の中で得られた成果を多様な視点から捉え直している点が印象的でした。例えば果樹を育てる取組では、「こういうことをやってもいいのだ」という経験を子どもたちに示すことができたというように、当初の計画とは異なる角度から成果を見出されています。このように、実践の中で新たな意味や価値を発見し、それを成果として言語化できている点は、市民活動が一段階成長してきていることの表れではないかと感じました。事業の実施にとどまらず、活動の過程そのものを価値として捉えられている点において非常に評価できるものと考えます。

・山納氏

まず、シフクノプレイスの活動については、子どもの主体性や自主性に重きを置き、大人はあくまで見守る立場に徹している点が印象的でした。高学年の子どもが年下の子どもに役割を委ねるなど、子ども同士の関係性の中で力を引き出していくプロセスが見られ、エンパワーメントの実践として学ぶ点が多いと感じました。

スキマダンスクラブの取組からは、芸術活動と社会性の関係について重要な示唆がありました。芸術に関わる人が社会に出ていこうとすると、社会課題を前面に出しすぎることで、かえって表現の本質が損なわれてしまうことがあります。しかし、社会的なテーマと真摯に向き合い、それを自ら引き受けて作品化しようとする過程を経ることで、結果として質の高い表現が生まれるという側面もあると感じました。こうした葛藤や試行錯誤のプロセスを経ているからこそ、活動の深みが生まれており、アーティストが地域や社会と関わる際には、一定の摩擦やハレーションを伴いながらも、新たな価値を生み出す力があることを、私たち自身が理解しておく必要があると感じました。

また、IDSや生駒南第二小学校果樹園プロジェクトの取組からは、地域活動における公益性のあり方について考えさせられました。例えば、地域の祭りの中で防災の啓発が行われていないといった状況からは、既存の活動と新たな視点との接続の余地があることが分かります。市民活動が自治会の取組を補完・強化する役割を担うことで、地域全体の活動を再活性化する可能性があるのではないかと感じました。総じて、各団体の活動はそれぞれ異なる領域にありながらも、「主体性の引き出し方」「社会との向き合い方」「地域との接続のあり方」といった点において、多くの示唆を含んでいました。これらをどのように捉え、今後の支援や制度設計に活かしていくかが重要であると感じています。

・佐藤氏

各団体の自己評価を見ると、「概ね目標を達成している」とされているものが多く見られました。ただ、申請段階の計画と照らし合わせてみると、実際には、当初の計画とは異なる方向に展開しているケースが多く見られます。ただし、それ自体は決して否定されるべきものではなく、むしろ本来の市民活動の姿として前向きに評価されるべき側面もあると感じています。一方で、その変化の中身によっては評価が分かれる部分もあります。「変化したこと」ではなく、「どのように変化し、その結果どのような価値やつながりが生まれたのか」という視点で評価していく必要があると感じました。また、こうした変化を前提とした場合、最終的な評価のあり方や、次年度の採択における判断基準についても難しさがあります。申請段階では発展性の有無を見極めることが難しく、どのような尺度で判断していくのかは今後の課題であると認識しました。

変化することを前提とするのであれば、「最低限ここは押さえてほしい」という軸を持つことも必要ではないかと感じます。ただし、その軸の設定についても、活動のジャンルによって異なるため、一律に定めることは難しいという印象があります。そのような中で、今回の取組で有効だと感じたのは、市役所の各部局とつながりを持ちながら進めていた点です。市の施策との関係を認識することで、活動の社会的な位置づけや意味を捉え直すきっかけになり、担当部署の行政職員からの視点や助言は、新しい観点での気づきをもたらし、結果として活動の社会性を高める要素にもなり得ると考えます。こうした視点も踏まえると、市民活動は単純な数値や成果指標だけでは測れない領域であると改めて感じました。

#### (5) 真弓ロビンス

##### 【申請者から事業の報告(省略)】

(アドバイザー) 選手コースとスクールコースのうち、当初想定していた選手コースの人数が集まらなかったとのことですが、その要因についてどのように分析されていますか。

(申請者) 選手コースはチームに登録し、試合に出場することを前提としていますが、中学校の部活動に所属している生徒にとっては、クラブへ移籍してまで試合に出ることへのハードルが高く、当初は参加が少ない状況でした。一方で、練習のみ参加したいというニーズは一定ありました。

(アドバイザー) 当初の想定より人数が少なかったとのことですが、その後の変化についてはいかがでしょうか。

(申請者) 1年間継続して取り組む中で徐々に参加者が増え、現在は選手コースが18人、スクールコースが7人と、当初とは逆転する状況となりました。地道な活動の積み重ねが、こどもたちに伝わった結果ではないかと考えています。

(アドバイザー) 次年度からの部活動の地域移行に対する不安が、参加動向に影響している可能性はありますか。

(申請者) 中学校の顧問が誰になるかなど、不透明な部分が多く、不安を感じている生徒や保護者もいると思います。そうした中で、スクールコースから選手コースへ移行することもしており、クラブでの活動が一つの安心材料になっていると感じてい

ます。

- (アドバイザー) 指導者や活動内容が見えることが安心につながっているのですね。
- (申請者) はい。コーチ陣も継続的に関わり、子どもたちと一緒に身体を動かす中で、学校とは異なる指導環境を提供できていると思います。
- (アドバイザー) 指導方法の違いについて、もう少し具体的に教えてください。
- (申請者) 学校の部活動では、大人数・異学年での指導となるため、個別に寄り添った指導が難しい面があります。一方、クラブでは少人数での指導が可能であり、個々のプレーに応じた具体的なアドバイスができます。また、「怒らない」「楽しく真剣に取り組む」という方針で指導しており、その点も子どもたちに受け入れられているのではないかと感じています。
- (アドバイザー) 子どもたちからの反応はいかがですか。
- (申請者) 具体的な要望を聞くことは多くありませんが、評価の声を聞くことがあり、一定の手応えを感じています。
- (アドバイザー) コーチ体制について、継続性や運営面はいかがでしょう。
- (申請者) コーチおよびスタッフは4人体制で活動しています。報酬については、参加人数や財源に応じて調整していますが、メンバー間で理解を得ながら運営しています。今後も継続して取り組んでいく意思は共有されています。
- (アドバイザー) 指導者の存在が活動の基盤になっていると感じました。

#### (6)NPO法人こどもゆめひろば

##### 【申請者から事業の報告(省略)】

- (アドバイザー) 当初は月1回の練習という計画でしたが、実際には大幅に回数を増やして取り組まれており、大変驚きました。一方で、この運営を複数年継続していくことは容易ではないとも感じています。
- (申請者) 子どもたちは「続けたい」という思いが非常に強く、活動が終わると次の機会を求める声も多くあります。そのため、保護者にも協力をお願いし、継続に向けて体制を整えています。
- (アドバイザー) 活動場所や楽器の保管場所については課題があるようですが、今後の見通しはいかがでしょう。
- (申請者) 現在も保管場所の確保には苦慮しており、適切なスペースを探し続けている状況です。他団体との共有も難しく、引き続き地域の中で活用できる場所を探していきたいと考えています。
- (アドバイザー) 空き店舗や事業縮小した施設など、地域資源の活用も一つの可能性ではないでしょうか。
- (申請者) その点も含めて、保護者や関係者を通じて情報収集を進めていますが、条件に合う場所を見つけるのは簡単ではなく、今後も検討が必要な課題です。

- (アドバイザー) マルシェの実施など、新たな資金確保の取組についてはどのように検討されたのでしょうか。
- (申請者) 運営費の確保に悩む中で、こどもから参加費を徴収する以外の方法を模索していました。その中で、スタッフ間の話し合いからマルシェの実施というアイデアが生まれ、出店者からの収益を活動資金に充てる形を取りました。結果として、活動を支える新たな仕組みとして機能しています。
- (アドバイザー) そうしたアイデアを生み出せるチーム体制があるのですね。
- (申請者) はい。スタッフや保護者も含め、日常的に意見を出し合える関係性があり、機動的に取り組めていると感じています。
- (アドバイザー) 今後の展開について、どのような構想をお持ちですか。
- (申請者) 学校の部活動が縮小していく中で、地域における受け皿としての役割が求められていると感じています。実際に他市町村とも連携し、同様の仕組みを展開する可能性について検討を進めています。指導したい教員と、活動の場を求めるこどもたちをつなぐ仕組みとして、全国的にも展開可能なモデルになるのではないかと考えています。
- (アドバイザー) 生駒市にとどまらず、広域的な展開も視野に入れているのですね。
- (申請者) はい。地域ごとの状況に応じながらも、広くこどもたちの活動の場を生み出していきたいです。

#### (7)一般社団法人 和草

##### 【申請者から事業の報告(省略)】

- (アドバイザー) 毎週の活動と第4日曜日の活動では、参加者の層や雰囲気の違いはありますか。
- (申請者) 日曜日は家族連れの参加が多く、主に都市部で疲れを感じている方が訪れ、にぎやかで開かれた雰囲気の中で活動しています。食事づくりなども行い、参加者同士が自然に交流できる場となっています。一方、平日の活動は少人数でゆったりとした時間を大切に、人と関わることに不安を感じている方や、大勢の場が苦手な方でも無理なく参加できるよう配慮しています。曜日も固定せず、来られるタイミングに応じて柔軟に受け入れています。
- (アドバイザー) 日曜日には食事づくりなども行われています。スタッフ体制はいかがですか。
- (申請者) 基本的にはスタッフ2人です。活動内容によって人手が必要になる場面もありますが、その都度、参加者の知人や関係者が手伝ってくれることもあり、少しずつ支え手が広がってきています。
- (アドバイザー) 以前、仲間を増やす必要性について助言があったかと思いますが、その点はいかがでしょう。
- (申請者) ボランティアの人数は少しずつ増えています。例えばピザづくりでは窯の管理や

焼き手が必要になるなど、活動の中で役割が生まれることで、自然と関わる人が増えてきました。

(アドバイザー) 横のつながりから支え手が生まれている点は、活動の持続性という意味でも重要ですね。

(アドバイザー) 活動場所について、地域との関係性や広がりは見られますか。

(申請者) 民家と里山が隣接する地域で、少し歩くと住宅地、さらに奥には自然が広がる環境です。そうした場所の特性もあり、「農的な暮らし」に関心を持つ人が増えてきており、実際に米づくりに挑戦する参加者も出てきています。空き家活用といった具体的な動きにはまだ至っていませんが、関わる人の関心が広がり、地域との接点が少しずつ生まれている段階だと感じています。

(アドバイザー) 環境に魅力を感じて、新たに関わりたいという人が増えていく可能性もありますね。

(申請者) 実際に農作業などをきっかけに関わる人は増えており、今後の広がりにつながる可能性は感じています。

(アドバイザー) 本来の目的であるひきこもり支援について、実践を通じて見えてきたことはありますか。

(申請者) 人との関係性はすぐに築けるものではなく、時間をかけてゆっくりと関係を育てていく必要があると感じています。例えば、田植えまでは積極的に参加されていた方が、夏の暑さをきっかけに足が遠のいてしまうこともありますが、その後も家族とのつながりを通じて近況を共有していただくなど、関係自体は続いています。また、中学生で学校に通えていなかった方が畑作業をきっかけに来るようになるなど、小さな変化も生まれています。

(アドバイザー) 活動を通じて、何かのきっかけが生まれる実感はありますか。

(申請者) 大きな変化が起こるといっても、きっかけが積み重なっていく中で少しずつ変化が生まれていく感覚です。焦らず、続けていくことが大切だと感じています。

(アドバイザー) 今後も活動を継続していく見通しはいかがでしょう。

(申請者) 継続していきたいです。

(8)おはなしかい、奈良

【申請者から事業の報告(省略)】

(アドバイザー) 活動を着実に広げ、多様な人とネットワークを築き、次の展開へとつなげられています。活動の信頼性や必要性が高まっていることがうかがえます。一方で、参加者数が少ないという課題については、工夫の余地があるのではないのでしょうか。より多くの人に「命の大切さ」を届けるためには、日常の生活動線の中での実施も有効だと思います。例えばスーパーなどで買い物をついでに関われるような形でトークイベントを行うなど、「目的を持って来てもらう場」から「偶然出会

う場」への展開も考えられます。また、参加人数にこだわりすぎると、集客そのものが目的になってしまうこともあります。

(申請者) 確かに、イベントとして成立させないといけないという意識も強くて、人数を集めることに気持ちが引っ張られていたかもしれません。ただ、お話を聞いて、日常の中で自然に触れてもらう形の方が、自分のやりたいことに近いのではないかと感じました。

(アドバイザー) 同志社女子大学で写真展をされるという点も、重要な取組ですね。出産を迎える世代に直接届けられる機会ですし、人生の選択にも影響を与える可能性があります。一方で、出産や命の問題は女性だけのものではなく、男性も含めて理解していく必要があるテーマです。共学の大学などにも展開されると、より広がりが出てくるかもしれませんね。

(申請者) どうしても「出産＝女性」という意識で届け先を考えていましたが、実際にはパートナーや周囲の理解もすごく大事だと感じています。男性にも知ってもらうことで、出産に対する見方や関わり方も変わっていくと思うので、今後は届ける対象も広げていきたいです。

(アドバイザー) 仲間が増えてきたことや、外部から声がかかるようになってきたというお話がありました。大切にされている、「主体的にお産を迎えること」や「生まれる力を信じることの尊さ」に共感する人が、少しずつ広がってきているのではないかと感じたのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

(申請者) 共感してくださる方の広がり方が、当初とは違ってきているという実感があります。もともとは産婦人科の先生方や医療機関と連携して広げていけたらと考えていたのですが、今は無痛分娩が主流になってきていることもあり、自然なお産の価値を伝えることが、必ずしも歓迎されない場合もありますし、助産院に関心を持つ人が増えることを懸念される声もあります。「医療の中で広げていく」という前提自体を見直す必要を感じるようになりました。

(アドバイザー) 当初の想定とは異なる状況が見えてきたのですね。

(申請者) 少し悩んだ部分でもあるのですが、ベビー用品を扱う企業や、プレママ向けのサービスを提供している事業者など、生活に近い領域から広げていく方が可能性があるのでないかと考えています。

(アドバイザー) 活動を通じて届け方や連携先を見直す必要性に気づかれたということですね。

(申請者) 最初に描いていた形に固執するのではなく、実際の反応を見ながら、どこにどう届けるのがいいのかを考えていくことが大事だと感じています。やりたいこと自体は変わっていないのですが、その伝え方は変えていかないとと思っています。

(アドバイザー) 非常に重要な視点です。専門領域にとどまらず、生活の中にある接点を活かしながら発信していくことで、より多くの人に届く可能性が広がります。今後の展

開に期待しています。

#### 【後半の事業総括】

・田中氏

いずれの団体においても、「こうではないか」と考えながら実践を積み重ね、その結果として活動の広がりが生まれていることが共通していました。特に印象的だったのは、おはなし会の取組です。実践を重ねる中でこれまで重視していた医療現場との連携にこだわるのではなく、企業やプレママ層とのつながりへと視点を転換された点は、大きな前進であると感じています。これまでの価値観や前提を見直しながら、自らの活動の位置づけを再定義していくプロセスは、市民活動において非常に重要であり、人や活動が変化していく力を改めて実感させられました。

また、企業との連携という視点が出てきたことも注目すべき点です。企業と連携することで資金面や運営面での可能性が広がり、活動のステップアップにつながるものが期待されます。市民活動や地域活動の中で企業との関係性をどう築いていくかは今後の重要なテーマであり、その兆しが見られたことは大きな意義があると感じました。

助成金の採択にあたって「これはやめておいた方がよいのではないか」といった過度な制約意識を持つ必要はないのではないかと感じました。税金を原資とする助成であることを踏まえつつも、初期段階から可能性を狭めてしまうのではなく、多様な試行を許容することも重要であると考えます。また、活動の価値や波及効果について、団体自身が十分に認識しきれていない側面もあるように見受けられました。自分たちが取り組んでいることが地域や社会にどのような影響を与えているのかを意識しながら活動を進めていくことで、さらなる発展や連携の可能性が広がるのではないかと感じました。

・土坂氏

4団体のうち2団体については、別途実施した専門家相談の中でも関わりを持ちました。対話を重ねる中で次々と新たな要素や本来の意図が引き出されていく状況でした。

例えば和草については、当初は引きこもりの方を主な対象としているように見えていましたが、実際にはより広い層に開かれた活動を志向していることが明らかになりました。活動の本質を言語化していくプロセスが、事業の方向性を定める上で大きな意味を持っていたと感じています。

また、真弓ロビンスは、本日の発表では触れられていませんでしたが、OBの関わりをどのように活かしていくかという点が重要なテーマとして浮かび上がっていました。例えばOBが主体となったファンドレイジングイベントの実施など、チームの外側にも支え手を広げていく可能性が考えられます。選手コースの拡充とあわせて、こうした取組が実現すれば、助成金に依存しない持続的な運営体制へとつながっていくことが期待されます。現時点では構想段階ではありますが、「自分たちの力でクラブを維持していく」という意識が醸成されつつある段階にあると感じました。

子どもをゆめひろばについては、今回の補助金の枠を一定程度超え、次の成長段階に入っている印象を受けました。今後も生駒市での活動を継続される場合は、現状の活動規模や展開を踏まえると、より広域的な助成制度や全国規模の支援へのチャレンジを視野に入れていく段階にあ

ると考えられます。おはなしかい、奈良については着実に前進している様子が見受けられました。試行錯誤の過程にありながらも、自らの方向性を模索し、協力者を少しずつ巻き込みながら歩みを進められています。2年目、3年目といった継続的な支援の枠組みがあることで、より安定した発展につながるのではないかと考えます。

・山納氏

いわゆる「現場解像度」が高まっていくプロセスそのものに価値があることを感じました。いずれの団体も、当初は仮説を持って補助金申請を行い、活動をスタートさせていますが、実際にやってみると想定と異なる結果に直面し、迷いながら試行錯誤している様子が見受けられました。その中で、どのタイミングでどのように寄り添うのか、助言するのか、あるいは一緒に考えるのかといった支援のあり方についても、私たち自身の力量や関わり方が問われていると感じます。

また、「当事者へのアプローチ」という観点でも重要な気づきがあったように思います。引きこもりや不登校といった課題に対して、「手を差し伸べる」という関わり方が本当に適切なのか、活動を通じて見直されていく様子が見られました。どうすれば本当に必要としている人に届くのか、そのアプローチのあり方自体を問い直していく必要があることを示しています。

部活動の地域移行に関する動きについても、真弓ロビンズやこどもゆめひろばの取組から多くの示唆を得ることができました。印象的だったのは、学校側の事情や課題に寄り添うだけでなく、「自分たちの方がより良い指導ができる」という確かな手応えを持って活動している点です。その結果、こどもたちが自発的に集まり、活動が継続していくという流れが生まれていました。実際に、これまで楽器に触れたことのなかったこどもたちが演奏できるようになり、「来年も続けたい」と言うようになるなど、支える側の強い意志と熱量が活動の推進力となっていることがうかがえました。こうした動きは、単なる制度としての地域移行ではなく、「何とかしたい」と腹をくくる大人たちによって支えられているプロセスであると感じました。

こうした活動従来の自治会のように地域課題の解決に軸足を置く活動とは異なる広がり方をしています。テーマや関心を起点とした活動は、地域を越えて展開されていく特性を持っていることが明らかになりました。このことから、市民公益活動を捉える上では、「地域に根ざした活動」と「地域を越えて展開する活動」の両方を視野に入れ、それぞれに応じた支援のあり方を検討していく必要があると感じました。センターとしても、こうした多様な活動の広がりを踏まえた支援の方向性を考えていくことが求められていると考えます。

・佐藤氏

いずれの活動においても当事者のニーズを丁寧に拾い上げておられることが、それに応じた活動を展開していこうというモチベーションにつながり、結果として活動自体の質が高まっていくという好循環が見られました。

実際に、申請段階と比べて、皆さんが自分たちの活動を語る際の言葉には明らかに自信が感じられました。当初の計画とは異なる展開になっている部分もありますが、自らの活動の意味や価値をしっかりと捉え、説明できている点は大きな変化であると感じました。協力者が増えていったり、活動の視点が生駒市内にとどまらず、より広いエリアへと広がっていったりと、1年間の中で発

展性が非常に大きく伸びていることも印象的でした。この変化は想像以上にドラマティックであり、市民活動の持つ伸びしろの大きさを改めて実感しました。

特に、部活動の地域移行に関する取組については、当初はこの補助金の枠組みで扱うテーマとして適切なのかという印象もありましたが、複数の団体の話を聞く中で、これは市民活動としての広がりを持つテーマであると認識が変わりました。その意味で、本補助金の趣旨に合致した形で活動が展開されていることが確認できた点は成果であると感じています。

今後の展開については、継続して活動していく団体に対して引き続き支援や助言を行っていくことが重要である一方で、仮に補助金の枠から離れる場合であっても、その経験や知見が次の活動へとつながり、市民活動全体の裾野を広げていく役割を担っていくことが期待されます。

### 【全体総括】

(事務局) 伴走支援のあり方について改めて考えさせられました。これまで私たちは、立ち返るべきものは申請書であると考えており、記載内容と異なる方向に進んだ場合に戸惑う場面も多くありました。しかし、手段だけでなくゴールそのものが変化していくことも含めて市民活動であるということを、本日の議論を通して学びました。今後、伴走のあり方についても改めて整理していく必要があると感じています。

(佐藤氏) 公的な資金を活用している以上、行政として一定の基準を持つことは必要です。特にどの範囲までを公益と捉えるのかはケースごとに異なるため、その都度丁寧に見極めていく必要があると考えます。

(山納氏) 当初の設計通りに進めることを強く求めすぎると、かえって本質的な価値が損なわれる可能性もあります。例えば、当事者支援において成果を強調しすぎると、かえって当事者にとって望ましくない状況を生むこともあります。行政として「地域課題に取り組んでいること」を価値として捉える視点と、活動主体が自然体で取り組むプロセスとの間にはギャップがあり、その整理は支援側の課題であると感じました。

(事務局) 実際に、活動が市域を越えて広がっていく中で、生駒市の地域課題の解決という観点とのズレを感じる場面もありました。しかし本日の議論を通して、必ずしも市内に閉じた活動である必要はなく、結果として市に価値が返ってくるのであれば、その広がりも含めて捉えてよいのではないかと感じました。

(田中氏) 市民活動は関わる人やフェーズによって姿を変えていくものであり、一律の成果指標を当てはめることは難しいと考えます。そのため、当初の目標達成度だけで評価するのではなく、「どのように考え方が変化したか」「どのような気づきや転換があったか」といったプロセスを丁寧に見ていくことが重要ではないでしょうか。

(事務局) 確かに、事業評価だけでなく、その過程に目を向ける必要があると感じました。

(田中氏) 今回1年間を通して見てきた中で、各団体が試行錯誤しながらも確実に変化し、前進していることが確認できました。その意味で、本補助金は有効に機能していると評価できると考えます。今後は、こうした変化をどのように評価指標として整理していくのか

が課題となります。

- (土坂氏) なお、本補助金の目的である「多様化・複雑化する地域課題に対する広域的な活動の発展促進」という観点から見ても、今回の各団体の取組は趣旨と整合しており、申請内容からの変化があったとしても制度との齟齬はないと考えます。
- (事務局) 本日の議論を通して、「やってみたら違った」という過程そのものを前向きに捉える視点の重要性を実感しました。今後は、そのような変化を前提とした支援や評価のあり方について、改めて検討していきたいと思います。
- (山納氏) 今回の補助金の議論を通して感じたのは、限られた金額の中で、非常に多くの学びや気づきが得られているという点です。例えば10万円という金額を単純に「市に還元される成果」で測るのではなく、その活動を通じて得られた知見や試行錯誤のプロセスが、次の活動に活かされていくと考えると、十分に価値のある投資であったと捉えることができるのではないのでしょうか。
- (事務局) 一方で、採択の段階においては難しさを感じています。初めから不安のある団体もあり、他自治体ではより厳しく選別するべきだという意見もある中で、どこまでを対象とするのか判断が難しいと感じています。
- (田中氏) その悩みは、市民活動に限らずあらゆる審査の場で共通するものだと思います。効率性を重視して一定の基準で選別するのか、それとも教育的な観点から可能性のあるものを丁寧に育てていくのか、そのバランスをどこに置くかは簡単には決められません。
- (山納氏) 重要なのは、「どの層を支援する制度なのか」を明確にすることだと考えます。すでに成熟した団体を選ぶのか、それともこれから育ていく可能性のある団体を支えるのかによって、採択基準は大きく変わります。また、その考え方を明確に伝えないと、不採択となった団体が「否定された」と受け取ってしまうリスクもあります。
- (事務局) 最近は「やりたいこと」から活動を始める人も多く、要綱にある「地域課題の解決」との関係性をどのように捉えるべきか悩むことがあります。
- (佐藤氏) その点については、「当事者性」から出発する活動をどのように評価するかが重要な視点になると思います。例えば個人的な経験をきっかけに始まった活動であっても、それが他者にとっても必要とされるものであれば、十分に公益性を持ち得ます。公益性を「最初から広く社会に開かれていること」と捉えるのではなく、「個人の課題が社会に接続していくプロセス」として捉えることも必要ではないのでしょうか。また、「市役所だけではできないことを担ってもらおう」という視点も一つの考え方です。あるいは、今後行政が取り組む可能性のある領域を先行して試行する、いわばパイロット的な役割として位置づけることもできると思います。
- (土坂氏) ただ一方で、市民活動を行政の補完や下請けとして位置づけてしまうことには慎重であるべきです。市民活動は本来、自発的で多様な価値を持つものであり、その独立性が損なわれると活動自体が矮小化してしまう恐れがあります。そのため、行政として関わる際には、支援の枠組みや言葉の使い方にも配慮が必要です。例えば「補助金」

という言葉が持つ意味合いによって、活動の位置づけが誤って伝わる可能性もあり、制度の設計や表現の仕方についても検討の余地があると感じました。

(佐藤氏) 行政側から「これをやってください」とテーマを提示する形は、やはり慎重に扱うべきだと思います。一方で、上がってきた提案を審査する際に、その活動がパイロット的な意味を持つかどうかという観点で公益性を捉えることは、一定有効ではないかと思いません。

(佐藤氏) 実際にそのような仕組みを導入している自治体もあります。例えば、自由提案型と行政提示型の2つのコースを設けているケースもありますが、行政側からテーマを提示した場合、応募が集まりにくい傾向も見られます。

(事務局) それは、行政にコントロールされる印象が強くなるからでしょうか。

(佐藤氏) やるべきことや期限があらかじめ定められてしまうと、委託事業のような性格が強くなり、自分たちのやりたいことができなくなるのではないかという懸念が生じます。その結果、金額が大きくても応募が減り、むしろ自由度の高い小規模な補助の方に応募が集中するという現象が起きています。一方で、引きこもりや不登校といったテーマは継続的に提案が上がってきており、一定の公益性が社会的に共有されている領域でもあります。こうした分野については、公的な教育だけでは届きにくい部分を市民活動が担っているという意味で、行政側からの関与やメッセージがあってもよいのではないかと感じました。また、現在のように関係課とつながりながら活動が進められていること自体が、行政内部にとっても市民ニーズを把握する重要な機会になっているのではないのでしょうか。そこから、無理のない形で協働関係が生まれていく可能性もあると感じました。

(土坂氏) 一方で、行政側に市民サービスを提供する立場としての意識が強く、「市民に満足してもらおうこと」が前提になっているようにも感じます。その延長線上で、市民活動に対しても同様の役割を期待してしまっているのではないのでしょうか。しかし本来、市民活動は新たな価値や関係性を生み出す存在であり、既存のサービスを補完するものではありません。むしろ、現在の状況を変えていくためのブレイクスルーとしての役割が期待されるものだと考えます。

(土坂氏) 長期的な視点で見れば、このような市民活動への投資は非常に費用対効果の高いものです。短期的な成果だけで評価するのではなく、将来的な価値創出の観点から捉えていく必要があると思います。

(山納氏) 豊中市の庄内コラボセンターの事例を見ると、市民公益活動センターの役割が非常に示唆的だと感じます。施設の中に介護予防や子育て支援、図書館機能などが併設されており、多様な人が集まる場になっています。その中で、市民公益活動センターは、個々の「やりたいこと」を支援するだけでなく、「この人とこの人がつながれば新しいことができるのではないか」といった関係性のコーディネートを担っています。例えば、高齢者が子どもたちに囲碁や将棋を教えるといった取組も、そうした関係性の中から自

然に生まれているものです。単なる場の提供ではなく、人と人、機能と機能をつなぐハブとして機能している点が特徴的です。その視点から考えると、市民公益活動センターには少なくとも二つの役割があるのではないかと思います。一つは、個人や団体の「やりたいこと」を支援する役割。もう一つは、地域や行政として「こうなればよい」という課題やテーマに対して、人や活動をつなぎ、新たな取組を生み出していく役割です。重要なのは、この二つを同じ枠組みで扱わないことではないかと感じます。例えば補助金制度の中で両方を同時に求めてしまうと、制度の目的が曖昧になり、活動する側にとっても分かりにくくなってしまいます。したがって、「やりたいことを応援する仕組み」と、「行政として実現したいことに対して協働を求める仕組み」は分けて設計することが望ましいのではないのでしょうか。

また、活動を通じて育ててきた人材や関係性を活かして、「この人にこういうことをお願いできるのではないか」といった形で声をかけていくことも重要です。新たな担い手を一から探すのではなく、これまでの活動の中で見えてきた人たちとの関係をもとに、次の展開を生み出していくことができると考えます。その意味で、市民公益活動センターは、単なる支援機関ではなく、人や活動のつながりを編み直し、新たな関係性を生み出していく拠点としての役割を担っていくことが期待されますね。

(事務局) 大変貴重なアドバイスをありがとうございました。